「命をあきらめない学習　～自分事としてとらえるきっかけづくり～」

令和７年度　高知県学校安全総合支援事業（災害安全）

高知県教育委員会　拠点校　高知県立若草特別支援学校

拠点校の取組

（１）拠点校の目標

＜目標＞

①自分の命を守ったり、緊急時の支援を受け入れたりすることができる児童生徒の育成

②自分や子どもの命を諦めずに守れるよう、事象を自分事として捉え臨機応変に行動することができる教職員の資質向上及び保護者の意識変容

③日ごろから関わり合いをもち、いざというときに支えあえる地域社会に向けた周知啓発

＜背景・課題＞

○登下校時に発災した場合の安否確認について

本校は、スクールバスを利用して登下校する児童生徒や自家用車による送迎で登下校する児童生徒、放課後等デイサービスや介護タクシーを利用して登下校する児童生徒など、通学方法は多様である。また通院後に登校するなど、登校時間も様々である。スクールバス乗車時の安全確保については、高知大学の岡村客員教授に災害時のスクールバス運行に関する助言を受け、津波による被害や浸水に加え、土砂崩れによる斜面崩壊や道路の陥没、電柱の倒壊による通行不可能な状況など、想定される様々な被害を考慮した避難計画の見直しの必要性を指摘された。今年度からは、ＧＰＳでバスの居場所を把握するアプリを活用することにより、保護者や教職員は、通信機器が使える場合においてはバスの居場所を把握することが可能となっている。しかし、自家用車や放課後等デイサービス、介護タクシーで通学している児童生徒については、登下校時に発災した場合、状況を把握する手段がないという現状である。

○児童生徒の学習について

本校は、今年度、高等学校に準ずる教育課程(高等部)および知的代替の教育課程で授業を行っており、児童生徒の病気や障害の程度、認知面等の実態差は大きい。小学部は特別活動または生活科で防災学習を行い、中学部・高等部については総合的な学習及び探究の時間で防災学習を行っている。知的代替の教育課程で学ぶ児童生徒の一部と準ずる教育課程で学ぶ児童生徒については防災学習を積み上げているが、重度重複障害を有する生徒の学びについては防災学習の目的や学習内容を模索しているところで、現状としては避難訓練以外の防災学習を積み上げることができていない。

○肢体不自由の児童生徒の身の守り方について

防災学習を通して、児童生徒は身の守り方について学習し、教職員は児童生徒の安全確保について考える機会を設定しているが、発災時に児童生徒が車いすから降りるのか、降りずに安全を確保するのか等、どのような身の守り方が最適であるか模索しているところである。また、本校の山側は土砂災害警戒区域に指定されており、緊急地震速報が鳴った際には、山側に面している教室等からは迅速に別の場所に避難する必要があるが、その際の児童生徒への介助や対応の仕方の共通認識をもつまでは至っていない現状がある。

○保護者の防災意識について

昨年度、学校で発災した場合と家庭で発災した場合のフローチャートを作成し、引き渡し表とともに学校と家庭とで情報共有を図った。起震車体験には児童生徒とともに体験した保護者が数名いた。しかし、防災研修会への参加は１名のみで、保護者の防災意識には

個人差がみられる。災害時に我が子の命を守ることに関心がないわけではないが、災害を自分事として捉え行動に移すことについては意識を高めていく必要性があると思われる。また、自宅が海岸沿いであるにもかかわらず災害時に避難する意思を示していない家庭もあり、肢体不自由がある児童生徒と逃げることを諦めている保護者の存在も気になる点である。

○教職員の防災意識について
　昨年度、南海トラフ臨時情報「巨大地震注意」が発表されたことを受け、教職員用のclassroom(オンライン上の共有サイト)を作成し、危機管理マニュアルや参集方法を確認できるフローチャートを共有した。しかし、危機対応マニュアルやフローチャートの内容を全員が把握しているかは不明である。また、教職員によっては、マニュアルの内容を自分事として捉えていない、あるいはマニュアルに頼りすぎて臨機応変な対応を想定していないなど、教職員の意識等にも差がある。

○地域との連携
　昨年度、弘岡避難所開設訓練や春野町の連絡協議会への参加により、地域の方々との情報共有を行った。起震車体験や防災研修会でも地域の方々と情報共有を行ったが、参加者は起震車体験が２～３名、防災研修会については１名のみであった。また、在籍児童生徒に春野地区の子どもは少なく、地域の方と学校や児童生徒との交流は頻繁ではないため、地域の方々に本校の児童生徒や学校のことを知っていただく機会が十分にあるとは言えないのが現状である。

（２）具体的な取組
＜防災教育＞
○防災デイキャンプの実施
　本校では南海トラフ巨大地震に備え、防災の意識を高める取り組みとして「防災デイキャンプ」を令和７年 11 月８日(土)に開催した。児童生徒や教職員、保護者に加え、福祉・行政機関地域とも連携し、一緒に防災について学んだ。12 のブースを設定し、体験や相談、発表や情報提供できる場を設定した。また、午後には児童生徒・教職員に加え保護者も参加する地震避難訓練も実施した。

ブース名	内容	関係機関等
福祉避難所体験	備蓄品・防災グッズ展示、段ボールベッド・簡易トイレの設営体験	(株)中村防災
福祉避難所相談	福祉避難所に関する相談・展示	高知県健康福祉総務課
防災教室	瓦礫・揺れマット体験	(株)フタガミ
ブルブルベッド	ブルブルベッドによる揺れ体験	
学習発表	本校生徒による防災についての発表及び質問タイム	
資料展示	東日本大震災に関する資料展示、絵本	
防災学習展示	本校・近隣校の防災学習に関する資料展示	
デイサービス展示	デイサービスの防災に関する資料展示	
煙体験	四つ這い・車いすでの避難体験	高知市南消防署
起震車体験	車いす・床面に降りての南海トラフ体験	一般社団法人高知県トラック協会

炊き出し	火起こし体験・お湯を沸かしてカレーライス作り・水消火器による消火体験	春野地域・消防団
PTA 展示及び体験	アンケートによる防災グッズについての資料展示、手作りランタン・ペットボールシャワー・ペットボトルキャップを使っての保存・手作りスプーンの体験	高知若草特別支援学校 PTA

○避難訓練

本校では、学期に１回、各避難訓練を実施している。火災避難訓練では、行方不明者が出たという設定やスロープの近くの理科室で出火想定にした訓練を実施した。消防と連携し名簿の活用だけではなく校内配置図を活用し、訓練を実施した。

地震避難訓練では、今年度より山側にある教室は全て安全とされている場所まで避難することを周知した。廊下には物が散乱している状況で児童生徒、教職員ともに安全な場所までいち早く避難しなければならないため、教職員一人一人がどのような行動をとるべきか考えるきっかけとなった。同日、土砂災害対応研修でもいろいろな場所でどのように避難行動をすればいいか、どのような課題があるか検討共有する場を設定した。また、10 月からは地震避難訓練に加えて毎月１回シェイクアウト訓練を実施している。

○出前授業の実施

在宅の被災障害者の支援を目的とした「被災地障害者センターくまもと」を立ち上げ、約３年間事務局長として災害支援を行った、車いすユーザーである東俊裕様（熊本県）を講師としてお迎えし、「障害と災害」をテーマに、児童生徒・教職員・関係機関を対象として、出前授業を実施した。実際に経験したことを基に、大切なことは何か、事前情報の入手や準備、周りの人の支援について講義していただいた。

○防災学習実践報告会

本校の教職員を対象として、実態別クラスによる防災学習実践報告会を行った。（図１・２）クラスで防災学習をどのように行ったかを発表、防災学習をしていく過程で出た成果と課題について報告がなされ、その後それらの課題を解決するための手立て等についてグループで検討した。

図１　小学部　実践発表資料

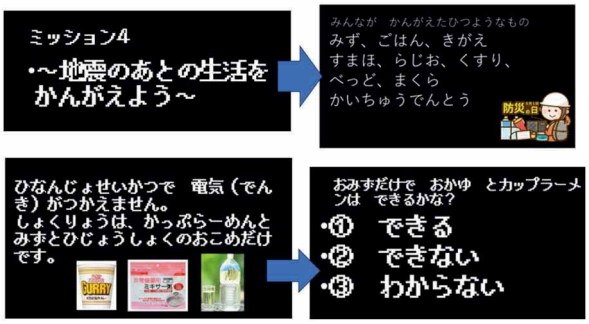

図２　中学部　実践発表資料

＜安全管理＞

○防災研修会の開催

夏休み、防災デイキャンプの日に防災研修会を行った。１回目の防災研修会では、本校の教職員・肢体不自由に関係する学校の防災担当を対象として、高知市健康福祉総務課の宮地まゆこ氏をお迎えして「福祉避難所の概要について」また、宮城県立気仙沼支援学校教諭、小松勝彦先生とオンラインで繋ぎ、「東日本大震災当時のことについて：一問一答形

式」研修を行った。前半では、福祉避難所の捉え方や福祉避難所のあり方について講義していただき、後半では実際に特別支援学校で勤務していた際に東日本大震災を経験した小松先生に対して、災害に対して本校であがった質問に答えていただいた。

防災デイキャンプの後に、教職員、希望する児童生徒及び保護者、地域住民や関係機関を対象として、高知大学岡村客員教授による「高知県下における南海トラフ巨大地震について～被害想定・地震の対応～」をテーマとした研修を実施した。春野町の被害想定や高知県下の被害想定について説明していただき、災害時に命を守り、誰もが生き続けることができるように備えることの大切さについて講義していただいた。

○高知若草特別支援学校・分校の情報共有

学校安全総合支援事業を通して、防災についての体制やマニュアルの見直し等を考えていくなかで、分校も含めた連携した動きや共通認識をしておく必要性が出てきた。そこで子鹿園分校・土佐希望の家分校の３校の防災推進チームでリモート会議を行った。災害時に対する参集方法やマニュアルについて等の検討・共通認識を図った。

（３） 取組における成果と課題

○児童生徒及び教職員・保護者の防災意識について

①防災デイキャンプ

煙体験や起震車体験、相談や情報提供、発表できる場を設定したことで、児童生徒は体験的に、避難訓練では普段感じることのない揺れ（図３）や煙（図４）を落ち着いて受け止める経験を積んだり、揺れや煙に対してどう行動するべきか自ら考えるきっかけとなったりした。また、教職員や保護者においては体験を通して、揺れから児童生徒をどのようにして守るべきなのか、事前の準備は何をしておくべきなのか考えるきっかけとなった（アンケートより）。地域の企業にも協力してもらい、防災に関する備品や備蓄を展示し（図５）、体験や試食をすることで備えへの意識向上にもつなげることができた。

福祉避難所相談ブースでは、避難所に関する分からないことを相談できる場となり、災害時の行動においての情報収集の場となった。また、高等部の生徒の防災学習の発表では、福祉避難所に関する発表であったため、発表での質疑応答で補足説明等していただき生徒の更なる学びにつながった。大勢の前で生徒が自分たちで調べて学習したことを発表したことで、保護者や教職員、関係機関から称賛の声があがり（アンケートより）、生徒の自信や達成感にもつながった。

図３　(株)フタガミ

図４　高知市南消防署　煙体験

図５　(株)中村防災　展示

近隣の学校の防災学習についての取り組みやデイサービスや家庭での防災対策についての情報をまとめたものを掲示（図６）して情報提供を行った。備蓄に関することについて、アンケートの結果内容を参考にしたいという声もあがり（アンケートより）、防災の備えについて考えるきっかけとなった。しかし、掲示場所が他のブースとは離れていたために、来室が少なかったため、掲示する場所を検討する必要がある。

図６　掲示物

防災デイキャンプを通して、児童生徒は、実際に保護者とともに煙体験や起震車体験をすることで、災害を自分事として捉え、日ごろの備えについて考えるきっかけとなった（アンケートより）。来年の活動に期待する声もある一方で、２学期はほかの行事も続いていたこと、また１日を通しての活動ゆえに児童生徒や教職員の負担感が強かった。また、防災デイキャンプ後に防災研修会を設定した。リアルな被害想定を聞くことで、教職員だけでなく、保護者も災害を自分事として捉えられる機会となったが、１日のスケジュールということもあり、保護者の拘束時間も長く研修の参加率は低かった。

②防災学習及び防災学習実践報告会

各クラス防災学習をする中で、緊急地震速報の音を聴いても落ち着いて支援を受ける児童生徒が増えたり、災害時にどう行動するか、何が必要か等自ら考えられる児童生徒が増えたりした。防災学習の出前授業では、児童生徒だけでなく教職員も普段なかなか災害を経験した人の話を聞く機会はないため、災害を自分事として考えられるいい機会となった。

防災学習実践報告会では、各実態別のクラスの困り感について全体で考えることで、同じような実態の児童生徒に対する困り感を共有したり、いろいろな角度からの指導方法について全体で共有したりすることで深い学びに繋がった。ただ、実態別のクラスの発表は１事例ずつであり、重度重複障害児における防災学習事例の積み上げが更に必要である。

○肢体不自由の児童生徒の身の守り方について

①火災避難訓練

１学期の火災避難訓練では、名簿だけでなく校内配置図を活用して安否確認等を行ったことで、行方不明者が最後どこで目撃したかという情報があり、捜索しやすいと評価していただいた。今後とも、必要な情報を的確に伝達できるように、継続していく。２学期の火災避難訓練では、３階のスロープに近い理科室を出火場所にしたため、スロープを使っての避難できなかった。階段での垂直避難を検討することや、避難できるように初期消火で火を食い止める必要がある。垂直避難では、車いすを１台下ろしたり上げたりするために最低でも４名確保する必要があり、児童生徒の人数によっては避難にたくさんの人員を確保しなければならない。また避難する際には、階段を使用し安全に車いすに乗った児童生徒を避難させなければならない。避難への人員を確保することで初期消火の人員が揃わないという課題もあがった。

②地震避難訓練

山側の教室は一律に避難するとしたため、教職員一人一人がいち早く避難しなければならないことを意識して訓練を行うことができ、地震速報の音が鳴ってから避難するまでの時間が短縮した。しかし、水泳の授業をしているとき(山の隣)にはどのように避難するか、校舎内には土砂がどこまで来るか、どういう避難が適切かどうか等、様々な課題が出てきており、現時点では教職員一人一人の臨機応変な判断に頼らざるを得ない状況になってしまっている。

○地域との連携

防災デイキャンプへの参加を地域住民に呼びかけ、消防団にも協力依頼をして地域住民とともに炊き出しブースを設置し、レトルトカレーを提供した(図５・６)。来校した消防団や地域住民に本校の児童生徒の様子を知ってもらい、またデイキャンプの取組を知っていただくことで、災害を自分事として考えられるいい機会となった。しかし、地域住民の参加率はとても低く、地域と連携するにはたくさんの課題が残った。

図７　炊き出しの様子(左)

図８　火起こし体験(右)

○肢体不自由の児童生徒の身の守り方について

①火災避難訓練

車いすに乗車した状態での垂直避難ができるようにするために、保護者に対し、車いすに印をつけること及び非常時には車いすを放棄することの周知及び学校 PT と連携し、各車いすごとの安全にもてるための持ち位置の確認を今年度中に行う。また、来年度には車いすの垂直避難を教職員のみで行えるよう訓練を設定する。さらに、避難訓練では、少ない人数で初期消火を行い、避難するために時間を確保したり、火を鎮火させたりすることが重要となってくるため、来年度の火災避難訓練では、消防署と連携して消火栓を扱う訓練も実施する。

②地震避難訓練

来年度は、水泳の授業を想定しての土砂災害対応訓練(教職員対象)を実施する。また、災害時に明確な基準のもと児童生徒及び教職員が命を守れるように、土砂がどのあたりまで来るのか、安全な場所・安全な避難経路について専門業者に依頼して検証する。

○学校・保護者・地域の連携

防災デイキャンプを持続可能な活動にするために、他の行事と日程のすり合わせを行う。児童生徒及び教職員の負担も考え、１日日程ではなく半日日程の検討や、児童生徒や保護者、教職員が災害を自分事としてとらえられるよう、引き渡し訓練を抱き合わせて行う等計画していく。学校・地域安全対策部だけでブースの内容を検討するのではなく、学校全体で考えたり、保護者や地域のニーズを吸い上げたりしてブースを検討する。地域との連携については、防災デイキャンプのみの関わりではなく、定期的に地域の掲示板やホームページを通して防災学習の内容や学校の他の行事等の活動を発信していく。また、福祉避難所の物品等がそろっていない現状があったため、今後、高知市福祉総務課と連携して物品を整えていく。

災害を自分事としてとらえられるようにするために校内防災研修会を開催する。教職員だけでなく保護者や地域住民も参加しやすい夏休みの時期で設定し、一緒にグループワークや訓練を行い、子どもを取り巻く内外の関係機関との連携を図っていく。